蒙古の歴史的研究の蘊蓄の一端を公にせられたもので眞に有益なる快著と謂ふべきである、凡て三十四章に分れ蒙古と清朝との複雜なる政治的經濟的關係より宗教的關係を論述し、清朝末の蒙古の新政施行より露西亞との關係を探り露支蒙相互の關係を論評し一九一二年の蒙古獨立の顚末外蒙古獨立宣言後の露支蒙關係を說明し最後に最近の形勢の激變を述べ、複雜せる政治的經濟的關係を述ぶるに豐富なる史料を經とし高邁なる識見を緯とし讀む者をして此の一書を省めては更に全羊を思はしむるもの、その名は學術的論著なりと雖も同時に我が國策の將來にとりての經世の最良參考書、學者は勿論苟くも支那蒙古問題を論じ我が國の將來を考ふる人士には必ず再讀三讀するを要すべき寶典なりとする。（菊版四六八頁、京都寺町丸太町弘文堂、價四・五〇）【那波】

●燕吳載筆　文學士　那波　利貞著

大正八年秋、著者禹域に遊び、北燕京より南錢塘に至る。歸來久しく其紀行を「歴史と地理」に連載せられしが未だ全程の半に達せず、依て其全般を簡明に拔萃したるもの乃ち是。著者の博識なる、沿道各地の古今沿革風俗人物を叙述すること極めて詳細にして、雜ふるに身親しく經驗せる實地の感想を以てすれば、後に此地に遊ぶ者の懷中に缺くべからざる好伴侶なるを疑はず。（四六版五〇八頁、同文館發行、價三・八〇）【宮崎】

The Cambridge Ancient History. Edited by J.B.Bury, F.B.A., S.A.Cook, Litt.D., F.E.Adcock, Volume II, The Egyptian and Hittie Empires to c. 1000 B. C. (Cambridge: University Press; New York: Macmillan Company, 1924.p.p. xxv. 751, 35s.)

ケムブリッヂ古代史は歐洲民族史の第一部として計畫されしものにして、その第三部をなす近世史十三卷（一九〇二—一九一一）は既に完成し、第二部をなす中世史は出版繼續中にして昨年第四卷を世に出してをる。近世史はアクトン卿、中世史はビューリー教授の意匠になり

しものである。古代史はビューリー・クック・アドコックの三氏によりて編纂されしもの、全八冊にて完成せらるゝ豫定なるも現在のところ第二卷まで上梓せられてをる。第一卷は一九二三年、第二卷は一九二四年に出版せられ、前者は後者の現はるゝ前に既に第二版を出してをる。古代史の執筆者はいづれも其方面の權威者である。第一卷は西紀前一五八〇までのエヂプト及バビロニヤを主要對象として取扱ひ、本文は十七章に分かれ序文ビブリオグラフィー等を合すれば七二六頁の大冊となる。

第二卷は序文本文及附錄を合して七七六頁の大冊である。本文は廿二章に分けられその主要部分は凡そ西紀前一千年までのエヂプト及ヒッタイト帝國に用ひられてをる。執筆者は第一卷で馴染の Peet, Thompson, Cook, Hall, Wace の外に Peter Giles, J.H. Breasted, D.G. Hogarth, J.B. Bury, H.T. Wade-Gery, Thomas Ashby, E.T. Leeds, W.R. Halliday. 等の權威が執筆してをる。

小亞に根據を置きしヒッタイト (Hittites, Hatti, Khatti, Hatt, Kheta, Heth) に關してはケムブリッヂのイムマヌエルカレッヂの學長にして比較言語學のリーダーたる F. Giles 博士及びオックスフォードのマグダレン、カレッヂのフェローたる D.G. Hogarth 博士がこれに當り前者は人種學的方面より後者は該民族の一般文化的方面より叙述してをる。ヒッタイト帝國の勢力及版圖は前二千年代の古代東方史に於て最も重要なる地位を有するものにして、過去五十年間に盛んに研究されてをるが未だ眞相が明にされざる狀態にある。本書に於ても、Giles 博士は該民族の人種學的言語學的關係は未だ不明のうちにあるとなしてをる次第である。(六頁)

エヂプト方面(三—八章)は斯學の鴻儒シカゴ大學のブレステッド博士が擔當してをる。博士の權威につきては贅言を用ひるの要はなからう。第二卷に於て注目すべき章は第十四章「イスラエルの興起」(三五二—四〇六頁)である。これは S.A. Cook 博士の筆になつたもの、歐米に於て必讀の文字として推薦されてをるものである。最新の史的文獻的批判の方法は全ページに涉つてこれを認むることが出來る。博士は先づ舊約書記事に關し「舊約書

はイスラエル史の材料こそ供給すれイスラエル史そのものは備へてをらない」といふロバートソン、スミスの見地に立脚してこゝより出發してをる(三五二頁)。博士は又「イスラエル」なる語は三樣の內容を持てることを指摘し舊約書中にこの區別をなすは困難事なるも史料批判上なさねばならぬことを力說してをる。三樣の內容とは、(一)南北兩王朝分離前の所謂「ヤコブの子等」としての全民族、(二)北イスラエル、南ユダの南北分離後の北イスラエル。(三)北朝イスラエル滅亡後のユダ、この三つである(三五五頁)。博士は本章の最後に於て、舊約史の特長は事實の眞理によりも觀念の眞理に在ると斷定を下してをる(四〇六頁)。次に重要なる十七章「アケア人及トロヤ戰爭」(四七三—四九七頁)十八章「ホーマー」(四九八—五一七頁)はともに J.B. Bury 敎授の筆、敎授はケムブリッヂ大學の近代史の敎授なるも此方面の執筆者として最適任者たることは萬人の異存なきことであらう。敎授は古くより廣くゆきわたれる懷疑主義を去りてホーマーを impropria persona に歸らしめてをる。イリアッド・オデッセイの統一性を支持しその作者の同一人なることを主張してをる「もし兩詩の作者を一人とすれば該作者をホーマーに歸せざることは困難である。もし二人の同樣に偉大なる作者を許さんか兩者の名は必ずや記憶せられてをらねばならぬ筈だ」(五〇七頁脚註)と、而して「ホーマーの時代は九世紀の中葉を下らない頃である」(五〇七頁)となしてをる。

第一卷は九名の第二卷は十三名の權威者の手によりて執筆されたるものとして、知識の斬新、確實の點よりいへば現存古代史中先頭に立つべきものであらう。しかし一個の古代史として統一性の見地よりこれを觀れば遺憾と思はるゝ節がないではない。編纂者の一大苦心のこの點に存せしことは想像に難くない。執筆者がその方面の權威として個性的であればある程全體としての統一性が困難となつてくることは止むを得ないことである。かゝる性質の書に一個性のものせるものに求むるが如きものを求むることは木によりて魚を求むるの譬をまぬかれぬであらう。相互に一長一短のあるは止むを得ないことで

あらう。又古代史執筆者中に英國に於けるバビロニヤ研究者中の King ともいふべき L.W. King の名の見えぬことはなんといつても物足りない。しかもそれが長逝のためなることは一入寂莫の感を深うせしむ。【中原】

◉京都帝國大學文學部考古學研究報告第九册　豐後麝崖石佛の研究

文學博士　濱田　耕作著

近時、考古學的研究調査の範圍が頗る擴大されてきたが從來、考古學的調査と云へば古墳や石器時代のそれに限られ、而かも或は先史と云ひ、或は原史と稱し、其の限界を固守するの感があつた。況んや歴史時代に於ける美術的遺物の如きは美術史家の取扱ふべきものとされて顧みるものゝ少かつたことは此れ全く悠久な時代を區劃的に截斷し、其の個々は或は人種學者、或は考古學者、或は美術史家の夫れ〳〵究明すべきものゝ範圍と想定し互に遺物研究の脈絡を缺いで居たからである。されど有史以前より以後に亙る遺物の連關は決して偶發的のものでなく、原始と云ひ、優秀と云ひそれは取扱ふものゝ見解に過ぎない。されば歴史時代究明の史家か所謂考古學的遺物を取扱つてヨリ良き解明を與へるものもあらう。これと同樣に考古學者が美術史家の取扱ふものを見て史家の推察し得ぬものを解答し得るものもあらう。斯くて近時、此種の研究調査の範圍が擴大されて來たことは獨り史界の幸福のみではなからう。斯かる意味に於て今次刊行せられた「豐後麝崖石佛の研究」は考古學的遺物調査の基礎に築かれた美術的遺物の調査研究であつて、考古學的研究調査の範圍が決して古墳や石器時代に限定せらるゝものでなく却つて其の調査研究の方法は美術史家と相連關して完全を期すべきことが判らう。本册は本文五章に分ち、石佛分布の主要地である大分市上野元町、大分郡稙田村、大野郡管尾村、臼杵町深田の四章に別ち各章は更に各節に分つて一々の像群及諸像の製作年代と美術的價値を叙し、第五章は後論として石佛造像の特質、作者と時代、樣式觀、支那朝鮮の石佛との關係、石佛製作の基礎等を論じ卷末に豐後地方石佛地名表を附されてゐる。以上本文約百五十頁に及び挿圖約五十を以てし、